

## 『熊坂』を謡う

新田由紀子

謡曲の会の「謡初め」で『熊坂』のシテ役を仰せつかった。ご存じ大盗賊の熊坂長範である。ワキやツレではない主役のいかつい髭面の首領だ。

なんで、私が『熊坂』を。常日頃、師から「もっと声を太く、大きく、思いっきり」と言われているこの新米が盗賊の頭役で謡うのか。どうも気が乗らず、稽古もしないでほったらかしていた。

ひと月ほど前になると謡初めの番組が印刷されてきた。見ると、ワキ役（相手役）は会の重鎮にして師範級のNさんが勤めてくださる。それなら安心の太船。ワキは謡い語りも多く、筋を受けて運んでくれる。シテはその神輿の上に乗って結構なことを言っていればよいのではないかと一人合点した。

『熊坂』とは言ってみればチャンバラ劇だ。ある時時代不詳、都の僧が東国修行の途中、青野ヶ原赤坂宿（大垣市あたり）にさしかかると、里の僧化身が現れて回向を請うが、堂内には拝むべき仏像もなく、大長刀に兵具・鉄棒が並んでいるばかり。これは山賊・夜盗の襲撃から里人を守るためだと里の僧は言う。堂宇と共にいずこともなくかき消える。草叢で夜を明かした旅僧の前に長範の亡霊が現れ、ここで息絶えた次第を陰々と語り出す。

豪勢な商人金売り吉次一行は、奥州へ逃れる牛若丸（義経）を伴い赤坂の宿に着く。遊女をあげての酒宴の果てに一行が寝入ると、長範の指図の下、七十人も盗賊集団が襲いかかる。へ牛若殿と八夢にも知らず 運の盡きぬる盗人等。へ然れども牛若子少し恐る々気色なく 獅子奮迅虎乱入飛鳥の翔りゝ 攻め戦へば。さしもの趙範重手を負ひて弱りゆき此の松が根の苔の露霜と消えし昔の物語。

謡ってみると、軽々と翻って小太刀突つ込む牛若丸と大盗賊の丁々発止の斬り合い調子にすっかり魅了された。勇猛で歯切れの良い曲である。これを謡初めに向けてしっかり稽古すれば、このぼんくら生徒の欠点が少しは解消されようとの、ありがたい師のご指南であった。